

随筆

榎原洋子・古道紀美子・馬淵兼一 選

知事賞

実家のあとさき

山田 静子（長浜市）

村の里道を人々が帰って来る。待ち人はこの一団に居るはずと私は目を凝らしていた。

日焼け顔の叔父が笑っている。叔母さん：アレッ、叔母さんは亡くなったはずと思いい目が覚めた。

実家を守っていた弟が四日の入院であっけなく逝った。

「あと頼む」面会の最後の言葉、後を頼むなどと初めて聞く言葉だった。

百か日の法要を終えた翌日、考えに考えた末の決断と『空き家バンク』に登録をする。

両親の亡くなった年齢まであと二年。二年くらいは私も健康な頭脳で居られるとは自負するものの先のことは……

思い切つての決断ではあった。

一般的に売れるのは村の端から、買う人は商売を目論む人が大多数。古民家をリノベーションした上で商売云々と聞き気持ちが萎えた。三年待つて売れなければ壊すしかない。息子は最初から壊す事に意欲的である。「壊すんか？」「壊すのが一番いい」「勿体ないなア、壊すんか！」と従兄弟たちは様々。

長くお付き合い頂いた近所の一人は「帰ってきててあなたが住んだらええがな」と半分本気、半分揶揄を含んだ進言。家終いなどマスコミでは話題になる事はあつても古里はまだまだ田舎。よそ者への警戒心には捨て難いものがある。まして、（長）と呼ばれる人たちは先輩の教訓を固く守つての自治会運営。何より従兄弟たちはこの里に根を張つて生きているのだ。妙な売り方は出来ないし私は自身に言い聞かせてもいた。

空き家バンクに登録して二週間が過ぎた頃内覧希望者がいると。まさか、まだ気持ちが定まっている訳じゃない。

取り敢えず希望の日は開けるけれど、家財道具などそのままですから……と、当日を迎えた。

空き家バンクの担当者は開口一番「定住としてではなく、セカンドハウスとして希望されています」気持ちが一挙に冷えた。

私の出した条件の一つは求む定住者である。時々きての利用なら何も人手を頼まなくても良いではないか。夥しい家財の始末もしなくていい。思考は登録前に戻っていく。

「本当に売る気があるのか？」と正されそうな気がした。会ってみるしかない。先ず此処からだ。内覧を希望している人は玄関に入るなり「田の字型の家」の作りに驚かれた。広〜いと口元を押えておられる。

この地方独特の伝統工法である事を伝え、太い柱を使つての住居は、事があれば四間の仕切りを払つて冠婚葬祭の全てを担えると説明して押入れを見せた。其処には一切の宴を賄う鍋、薬缶。酒器、什器からお盆、まな板等、仕切られた棚に整理してある。

六月の半ばであつたけれど、窓という窓を開け放つていたので風が抜けて心地よい。

四十代半ばの女性は懂れていた古民家で、いつまで見ても飽きないと漏らし、急用で来られなかったご主人

共々、もう一度見学の機会を欲しいと帰って行かれた。

最後に紅柄の柱や梁の色を手に触れて色の付かないのを確かめながら。

七月に入つて再度の訪問が決まったものの私の方は未だ心決まらずで、鴨居の遺影もそのままに迎えた。ご主人の方は初めての来訪にも関わらず奥様の説明で購入を決めておられた様子。敷地境界の確認、自治会長との面談などその日のうちに決められてしまった。

私も本気で家財の始末にかかる羽目となり、仏壇の「お性根抜き」は寺院に、引き取りは業者に託す等些事の手配に奔走。毎日実家に通い、捨てて捨てて捨てまくり感慨に耽る時間など無く鬼のような日送りだった。今となればその急速な流れが良かったと思つている。

最後に二階の箆筒類を処理場に運んだが、その時の業者が「よう売れたなア、普通はこんな場所売れへんで！あく、きつと見栄えが良かったンやな。草も生えて無いし、外回りが綺麗に整理されてる」誰も言ってくれなかったこの一言を私は劳いの言葉と聞いた。

家一軒始末する事の大変さはやった者にしか解らない。全部業者に託せるものなら託したい。されど弟はここで暮らしてきたのだ。息をしていた名残は其処此処にあり、そ

れらは決して第三者には触れさせられない事物だったから。暑かろうと辛どかろうと唯一残ってしまった私の役目と見上げる鴨居に弟は微笑み、父は洪面を作っている。

「あんたの膝に遊ぶこの子は家のためには成らん子オヤ」。私がまだ三つ四つの頃、弁当を使わせて…と立ち寄った僧が私を指して言い残したと聞いたのは二十歳を過ぎた頃か。喜寿を家族に祝って貰い、幸先のよい正月と喜んだのも束の間、弟が逝き僅か半年で実家を手放した私、やはり家の為には成らぬ子であった、もうご先祖さまに合わず顔も持たぬ身と初めて背中が折れた。初盆の供養に訪れた寺院で住職の「よう、やははったな、お姉さん」に涙が溢れた。

特 選

NHK大津放送局長賞

時効にしてもいいですか

田 中 恵 子（彦根市）

昨今は小学生から高齢者までほとんどが携帯電話を持っている。けれどもつい六十年ほど前では固定電話もない家庭が多かった。

その頃、私の家は商売をしていて、家と店が離れていたため、家に電話を付けたのは近所で早い方だった。私の家の電話を呼び出し電話にしていた家が数軒あった。特に左隣の山田さんへの呼び出しがよくかかった。

「電話です」

と呼びに行くと、山田の小母ちゃんはミシンを踏んでいた。当時、彦根は縫製産業が盛んで、市内のあちこちに家内工業に近い縫製工場があった。その下でミシンの内職に励む女性が大勢いた。

小母ちゃんはずっかきで転びそうになりながら駆けてきた。電話の前にも立っても「すみませんねえ」とお辞儀をし

ていた。日中にかかるのがほとんどで、内職に関係するものだったのだろう。

私は二十歳前だった。

電話がかかって母が出た。山田さんへの呼び出しだった。母が二階の私を呼んだ。

「私、今、忙しい」

「何言ってるんや、早よ行ってき」

母の強い口調にしぶしぶ降りてきた。

「もう腹立つ、電話ぐらい早よ引け」

「何でこと言うんや、お互い様や」

外へ出ても体中が文句を言っていた。

どうせ小母さんはずぐに出でこない。ドアを開けると、電動ミシンがうなっている。負けずに大声を出さないといけない。何度も叫ぶのだ。ドアノブに手をかけた時、自分でも驚くようなことを言ってしまった。

「くそババア、ミシンなんか止めてしまえ」

私は、母より三つほど年下の丸顔の山田の小母ちゃんが好きであった。それなのにそんな言葉が出たのである。

アツと思った。

小母ちゃんが外にいたのだ。五メートルほど先で後姿を見せて草取りをしていた。小母ちゃんは振り返った。私の

足は地面にくっついてしまった。

その後、しばらく山田さんの家の前を通らなかつた。いつの間にか山田さんも電話を付けた。呼び出しに行くことはなくなった。

私は結婚して家を出た。三年後に父が病死して母は一人になった。山田さんの家も小父さんが亡くなり子供たちも独立して、小母ちゃんは一人暮らしになった。それからもミシンの内職を続けていたと思う。

母は七十五歳を過ぎた頃より物忘れがひどくなった。私ができるだけ母のもとに帰り、帰るといつも二人で散歩した。母は足が丈夫で歩きたがったのである。

山田の小母ちゃんと出会うことがあった。小母ちゃんは必ず母に話しかけてくれたが、母は無愛想にすたすたと歩いていってしまうことが多かった。

「すいません、何か迷惑かけていませんか」

「大丈夫やで、あんたは優しい子やねえ」

胸がきゅつと縮んだ。私は小母ちゃんに投げつけたあの暴言を忘れられずにいた。

六月のある日、玄関に入ると強い香りに目がさめる思いがした。げた箱の上に、真白いユリが二本、すつきりと生

けられている。

「きれいやなあ、このユリ、どうしたの」

「さあ、どうやったかな」

母は覚えていなかった。

二人で歩いた。山田さんの家の前からユリの強い香りが道まで伝わってきていた。花壇にユリが数本見えた。まぢがない。帰ってすぐ隣を訪ねた。

「ユリ、小母ちゃんが下さったのですね」

「今朝、持っていったんよ。お母さん、お花が好きやからな。わざわざ来てくれたんか。あんたは優しいねえ。私も女の子が欲しかったわ」

小母ちゃんの子供は二人とも男の子だった。

奥の方で電話の音がした。小母ちゃんは出ようとしない。

「電話がかかっているみたいです」

「あれ、まあ」

と振り返った小母ちゃんは奥へ駆けた。

「ごめん、また後でかけ直します」

小母ちゃんはそう断って、また玄関先の私の前に座った。丸い顔をますます丸くして、恥じらうように笑った。

「ごめんな、若い時から耳が悪くて、特に後ろの方の音はよく聴こえない。ずっとミシンばかり踏んできたからか

なあ。これしかできなかつたんやからしょうがないの」

そうか、あの時、小母ちゃんには私のひどい言葉が届いていなかったのだ。

小母ちゃん、ごめんなさい。私は優しいことありません。でもあのことはもう時効にしてもいいですか。そんな思いを込めて、私はにこっと笑顔を返した。

特選

ムクドリ達の冬

谷口 恵美子（長浜市）

近年、うっすら雪が積もる頃になると我が家の柿の木に、取り残した柿の実を目当てにムクドリ達がやって来るようになった。

今まで何の関心も持っていなかったが、あまりに沢山飛んできて賑やかに鳴くのでつい興味を持って観察するようになった。

ムクドリとはスズメ目ムクドリ科の小鳥。

元々は害虫を食べる益鳥とされており、人懐っこくなかなか賢い鳥なのだそう。

昔は高い木の上の実は、ムクドリのために残しておくと言う習わしもあったのだとか。

それが今では鳴き声がうるさい、糞で汚れるなどと問題視され害鳥と呼ばれるようになってしまった。

農耕社会から工業社会へと世の中が移り変わり、変わらぬ鳥たちは行き場を失ってしまった。

ムクドリ達にとっては、可哀想な話だ。

のんびりした田園地域では少々賑やかな鳴き声も苦にはならないが、都会ではそうもいかないことはよくわかる。

野鳥を眺めたりする趣味はなかったが、毎日毎日二十羽以上も飛んで来ては柿を啄む姿を見ていると、つい親近感を持つてしまう。ましてやカラスに襲われて、柿の木から追ひ払われる姿を見ると不憫にさえ思えてしまう。

そんなカラスの襲撃にもめげず、飛んできていたが、やがて柿の実もほとんど食べ尽くしてしまった。

まだ食わずに残しておいた柿があったので、いくつかまとめて、柿があることが解るように、雪の上に置いてみた。一日目は、警戒したのか気づかなかったのかそのままであった。

二日経つと、食い散らかされている。

カラスだったら、しゃくに障るので次は観察しやすい家の近くに置いてみた。

こうして、餌付けをするように畑から、家の近くへと少しずつ、居間から見える場所にまで餌場を移動した。

夫が面白がって、背の高いフラワーガードと物干し竿を使って止まり木を作った。

そうやって、ムクドリが止まり木にやって来るのを楽し

んでいたが、餌用の柿の実もなくなってしまう。代わり
にミカンを置いてみたが好みではなかったようだ。
調べてみると、柿やリンゴ、ブドウは好むが柑橘類は食
べないと記されている。

丁度収穫したキウイの箱の中に、熟成促進用の、リンゴ
を入れていたのを思い出し餌用に使ってみることにした。
面白がっていただけの夫だったが、少し真剣になり居間
から撮影できる場所に物干し台を移動している。

物干し竿の上にリンゴの置ける餌場を作り、こまめに観
察するようになった。

ムクドリはリンゴがたいそう気に入ったようで、種も苳
も残さず食べていた。

しかし、窓のすぐ近くに行くだけで、警戒して飛び去っ
てしまう。

窓を開けて近くで写真を撮るなど不可能である。

それでも、そとと窓際に立ち続け気配を消すようにすると
警戒心が薄れていくのか自由にリンゴを啄むようになった。

冬のムクドリは寒さをしのぐため、羽根の中に空気層を
作り膨らんでいて、モフモフしたぬいぐるみのような愛ら
しきがある。

定期的に飛んで来るのは五羽ほど。

先ず、一羽が屋根の上から偵察し舞い降りる、続いて二
羽か三羽飛んで来る。

彼らは家族なのか、仲が良い。

二羽一緒に啄む時もあるが、止まり木に止まって順番待
ちをするのである。面白いもので満足するほど食べる訳で
はなく、適当に交代し後ろへ並ぶと言う感じなのである。
待っている二羽がどう言う訳かけんかになり、そのまま
止まり木から転げ落ちる様には、思わず笑ってしまう。

ただ、見るからに大きいモフモフが飛んで来るとその四
羽は、さっと飛び立っていく。

序列や力関係は当たり前存在するのである。

極寒の雪の日々、ムクドリの姿に目を止め写真や動画を
撮った。そして改めて「共生」と言う言葉思い出した。

「共生」とは単にかわいい、面白いと眺めるだけではなく
彼らの存在を認めて受け入れる事でもある。

柿を横取りして、しゃくに障るカラスであっても、自然
の中で生きて行くには当たり前事なのである。

餌のリンゴも底をついた。

それでも何日かは、屋根の上から「何もないの？」と言
いたげに首をかしげて見下ろしていた。

諦めて飛び去る姿に「春まで頑張り」と声を掛けた。

特選

傘寿

江畑 民子 (彦根市)

今年八十歳となり傘寿を迎えた。目出度いことなのである。傘寿の漢字を分解すると、「八」「十」と読めることが由来なのである。傘を開いた時、末広りの形にも縁起の良さが込められている。

六十歳の還暦は赤の頭布と赤のちゃんちゃんこであり、傘寿は黄色の頭布と黄色のちゃんちゃんこを贈るのである。傘寿は知らない人もおり、省略もされているようだ。

誕生日には子供達からお花や化粧品が贈られて来る。お花は枯らさないように大切に育てる。翌年花が咲くと、世話の成果だと自慢げに家族ラインに報告する。花が咲くことも私の最大の楽しみのひとつなのである。

生命の有る間は鏡の前に座り化粧をしたいと願っている私は嫁や孫に塗り方を教えて貰っている。目元に塗ると目力が出て元気で若々しい顔に見える。海外の化粧品は艶があり皺の間にも上手く馴染んでくれる。

毎年のようにお花や化粧品が届くなら、今年は傘寿だから思い切って私からリクエストしようと考えた。さて何にしようか、あれこれ考えて見るとなかなか思いつかないものである。お気に入りのウォーキングシューズがくたびれて来たことを思い出した。

一番欲しくて嬉しい贈り物はウォーキングシューズだと決めた。長女にそつと告げた。全員賛成だと即答が来たのだ。早速メーカーとサイズを報告。色はおまかせにした。

お嫁さんも加わり、ネットで調べたり、久しぶりの全員参加の楽しいひと時だったようである。色は息子2人で検討したようでピンク色と決まった。

数日後荷物が届いた。真っ赤な箱の中に丁寧に包装されたピンク色のウォーキングシューズがあった。私に似合う色、喜ぶ色を息子たちが選んでくれたことに目頭が熱くなった。傘寿だから我がまま言ったことが家族の絆を深めていた。近況を語り合えた機会となった。

このピンク色のシューズを活用しなければ意味が無いのだ。新しい品が手に入ると暫くは眺めていることが私の癖なのだ。ユーチューブを見ていたら外国人観光客が日本の良い場所、行きたい場所を答えていた。

「中山道のサムライロード」

中山道は江戸から京都までを内陸経由で結ぶ街道である。武士の参勤交代、皇女和宮のお嫁入り、木曾義仲の挙兵など多くの歴史的な出来事の舞台となった街道である。

「サムライロード」とは馬籠から妻籠の木曾路を歩くコースのことであり9KMの山道を約3時間掛けて歩くのだ。中山道には69の宿場町が存在した。日本三大宿場町は一般的に奈良井宿、妻籠宿、馬籠宿の三つと言われている。この木曾路の山道は、木曾の山々や溪谷、滝など四季折々の美しい景観が楽しめるのである。外国人観光客が「歩いて日本を感じる」体験を求めて訪れる場所である。石畳の道は馬、人が歩き易いために工夫されたのだろう。「サムライロードを歩きたい」胸が高鳴った。ピンクのシューズを履いて、この道木曾路を歩きたい。心臓が躍る。子どもがバタバタ足踏みするような気持で娘に伝えた。

「兄から許可が出たよ。娘二人が同行すること、しっかりと補佐することを条件に約束したよ」八十歳の健康を心配したのでろう。

出発の朝、飾っておいた場所からシューズを玄関に降ろした。まささらなやさしい色の美しいシューズ、履くのは勿体無い。

ゆっくりと足を入れる。立って見た。よいクッションだ。

ふぁーとする感じが心地良い。このシューズなら9KM歩けるだろう。

「歩きはじめたみいちゃんが、赤い鼻緒のじよじよ履いて、おんもに出たいと待っている」思わず口ずさんだ。娘も笑った。八十歳の気持はみいちゃんと同じなのだ。

馬籠の看板を囲み記念撮影だ。大きな水車が回っていた。江戸時代から手直しされながら使われている。時代を見つめて来たのだ。

晴天だ。山、川、杉林、石畳、何もかもが美しい。茶店で甘酒を頂く。本物は美味しい。麴の粒を最後まですすす元氣百倍だ。何事が有っても傍には娘二人が居る。こんな安心の中でピンクのシューズで歩く。イケてる八十歳のおばあさんだ。

道中の木造建築や石畳の街並み、あちこち見学しながら、五平餅を食べお茶を飲み、私の足はまだ元氣で疲れは無い。

途中大きな茶店があった。昔の農家で無料のお茶と飴のサービスがあり、沢山の人たちが休憩していた。茶店の前には大木のしだれ桜があり、五月だったがちらほら咲いていた。満開の時期はどんなに素晴らしい花見が出来るだろう。途中に男滝、女滝もあり外人さんが滝のシャワーを浴びていた。妻籠の宿場が見えて来た。美しい町並みに癒さ

れる。馬籠を出発して5時間、このシューズが私を守りサムライロードを歩かせてくれた。傘寿を祝ってくれて有難う。家族にも有難う。

特選

稲作農家

桂 田 孝 司 (高島市)

「えっ、お米作って儲かっていないの」

妻が驚いたように言う。なにを今さら、知らなかったのか。これまで儲かっているなどと言ったことはないはずだ。

わが家は昭和三年生まれの父が母と長らく農業にいそしみ、副業もしながら兄弟を育ててくれた。わたしも家族の一員として休日には手伝いもした。七十五歳の時に第一線を退いた後を引き継いだわたしは四十九歳、役所に勤めていたのでいわゆる第二種兼業農家、俗にいう「日曜百姓」ということになる。毎月の収入はあるので農業での収支には関心が薄かった。農業専用の農協口座の帳尻はほとんど増減がなかったことを思うと、利益が残ることはなかったのだった。

父に教わりながらの従事だったが、はじめは要領がつかめなかった。肥料をやる時期はテキストにあるが、厄介なのは水と畔草の管理である。

水は普通夕方に入れて翌朝に止める。夜間に冷たい水を入れ、昼間は止めて水面を日光に当てる。そうすることで昼夜の温度差が広がり、おいしい米になるという。しかし五枚ある田んぼはそれぞれ水の持ちが違う。すぐに干上がつてしまう田もあれば、そうではない田もある。入れる量を水口で調整するのだが、流れてくる刈り草で水口が詰まることもよくあって泣かされる。しかも厄介なことに除草剤をまいた田は、やや深水で数日管理しなければ薬が効かない。油断すると部分的に土が顔を出してしまうことになる。

だから当初はよく失敗した。勤務もあつたので慣れるまでに時間がかかった。この水管理が、田植えから収穫の直前まで中干しの時期を除いて毎日続く。

よくテレビで、「きれいな棚田ですね」などという農村シーンがあるが、農家からみればあのすべての小さな田んぼにも一枚一枚全部水口があつて、棚田を日々管理されている農家のご苦労に思いを巡らせてしまう。きれいなごとではない。

そして近年の異常なお天気。渇水で稲が枯れるニュースもあれば、長引く線状降水帯の豪雨氾濫で水没する田んぼもあるの、心が痛む。当然のことながら水は常に適量が

用水路に流れているわけではない。日照りで水源の水量が減ると水を確保するための作業に駆り出されることになる。

「草刈りが大変」とは、稲作をしている人が口をそろえて言う愚痴だ。畔に生える草の管理は一番の重労働かもしれない。五月初旬の田植えから九月初めの稲刈りまでの四か月余りに、五回くらいの草刈りが必要になる。また取り入れがすんでも繁茂する草を放置しておくことは景観上も好ましいことではない。機械化で楽になったとはいえ、勤務がある身には休日を費やすしかなかった。みじめたらしい雨降りの作業は出来れば避けたいから、いたずらに草丈が伸びてくるのを眺めていることもあつた。

草刈りがなければ米づくりの労力は半分以下になるだろう。まさに草との闘いの日々なのである。

そんなこんなで稲作を任されて初めての年は、刈り取りが終わった時にやれやれと心底放心したことを覚えている。収穫高などを気にする心境ではなかった。

あれから二十年余り、退職後は毎日が日曜日だとはいえ、農作業に追われる日々が続いている。勤務の傍らに米作が続けられたことがウソのようにも思える。父からひきついだ農地を守ってきた安堵と、自分が育てたお米を家族で食べられることがうれしい。

「少し田んぼを減らしたらどうなの」
 妻は体力を心配してそう言う。言われなくてもいつかはそんな日が来るだろう。

多くの零細農家が収益を度外視して農業を続けている。そして「今の機械が壊れたらやめる」と聞くことが多い。機械の更新が離農を後押しする現状は、農業者の高齢化と相まって仕方のないことかもしれない。

今年、米価が二倍近くに暴騰して、農協の買取価格も大きく引き上げられた。しかしわたしが知人に分ける小売り価格はその間に値上げできない気分で、市価の半値で、それでも「高くなってすみません」などと言っている始末。これが農家の気質だとしたら、割り切って儲けることなどできないのは当然のことだと苦笑する。いやこれが人のお付き合いというものだと納得することにしよう。

差し迫った懸念は連年の猛暑である。明らかに米の品質が落ちており、米作の持続すら心配される。「農業はお天気次第」とはよくいったものだが、零細農家の笑ってすむ問題でないことは明らかである。

政府も農業政策を見直す動きが出てきた。本気の対応を期待する中で、わたしは儲からないが充実した稲作をもう少し続けていく。

特選

学びの学び

古橋 童子（長浜市）

個人ピアノ教室を開業して十数年になる。ほとんどポラントニアのようなつもりで始めたものだ。自分があまりレベルの高い技術を持っていないこともあり、「私でいいのですか？」という気持ちで生徒を受け入れている。

気づけば、週一回三十分レッスンで、三十人近くの生徒が通ってきてくれている。宣伝など全くしていない。全て口コミで集まった生徒だ。

そもそも私は、複数人を一度に相手することは向いていない。一人に対して全力を尽くすのみである。私を持っている技術はとにかく伝えたい。生徒が弾けるようになってくる姿は嬉しいものだ。ともに悩みもがき、解決しながら一曲を弾けるようにしていき、合格できた時の喜びを全力で分かち合う。この瞬間は幸せいっぱいだ。

ピアノのレッスンは、努力と達成感のシーソーだ。私はそもそも練習嫌いで母親にこっ酷く叱られながらピアノと

向き合ってきた。ピアノを弾くのは好きだし、弾けるようになった曲なら時間が許す限り弾いていられる。けれど、一曲を弾きあげた後は、新しい曲の譜読みからまた始まる。これがなかなかしんどいのだ。私が習っていた先生は教えるのがうまくと評判の人だったが、とにかく怖かった。練習できていなければ容赦なく叱られた。それが怖くてレッスン前日に猛練習したものだ。けれど、先生には練習が足りていないことなどすぐばれる。教本の余白に大きな字で「一日三回以上練習！」と書かれたこともある。

現在も、ちゃんとした楽器店が経営する音楽教室があるし、実績ある高名な先生が開く教室もある。高額なレッスン料は支払わねばならないけれど、ちゃんとしたシステムで高度なレッスンを受けられる。それでも、うちが安価だからかもしれないが生徒を毎年数人ずつ迎え入れている。入会理由は様々だ。住宅事情でピアノが家に置けない家庭。プロになりたいわけではなく、ちょっと楽しめる程度でいいという家庭。個人の成長発達がゆっくりなために多くの人と同じペースでは心配という家庭。やりたいという意思はあってもこの子は続かないのか分からないから楽器を早々に買うのをためらって見極めたい家庭。

事情はともかく、それぞれに全力で向き合う。十数年や

っていると、個性というものがここまで一人ひとり違うのかと驚くことが多い。個人レッスンにしておいてよかった。一人ひとり、本当に知識と技術の入力方法が違っている。言葉や音で理解する子、文字や形で理解する子、音符通りのロジックで弾く子、メロディーを聴覚で聞き取って覚えて弾く子。安易に練習が足りていないと叱責はできない。何度教えてもできないのは、電気ポットにガスボンベを入れようとしているのに近いこちらのアプローチのミスの場合が多いのだ。

分散和音の伴奏が不器用でなかなか弾けない子が一定数いる。音符に色を付けてみたり、細かく分けて繰り返し練習させてみたりいろいろしたが、どうしても指が柔軟に動かないのだ。その手の固さはそもそも固いのではなく、音符、鍵盤、指の位置を関連付けられず混乱している場合がある。真面目な子に多い印象だ。楽譜にかじりつき、音符一つ一つ、鍵盤一つ一つに別々にこだわる。かたまりとしてメロディーが取れない様子。ある時、楽譜通りの分散ではなく純粹に和音にまとめて練習を始め、指の開き方の変化を覚えてから分散に戻してみた。するとどうだろう。スラスラと弾けるようになったのだ。こんな単純なことに何故気づけなかったのか。生徒に嬉しさを伝え、ともに喜び

合う。それからその子は一曲を仕上げるのが早くなった。自分もできると感じた瞬間というのはとても大きな成長のステップで、自信のなさから縮んで固くなる手が元気になる。生徒には最大級の祝福を伝えながら、心の中ではいっぱい謝罪する。もっと早く気づいてあげられなくてごめんなさい。私の要領が悪いから、あなたの学びの入り口を見つけないにこんなに時間がかかってしまった。うまくいかず面白くない辛い時間を、辞めてしまうことなく続けてくれてありがとう。

生徒達は教室に通い、ピアノの弾き方を学んでいくが、私は私で、一人一人の学びはどのタイプなのかを見つけて大きな学びをしている。入力というと機械的に思えるが、それぞれ習得方法が違い、方法が合わないとその成長は止まるに等しい。今まで通ってくれた生徒達がその練習方法のバターンを増やしてくれる。ありがたい学びなのだ。

一日数人のレッスンを終えるときぐったり疲れてしまうが、これからも個人に合わせたレッスン方法とペースは学び続けていこうと思っっている。

特選

うなぎ弁当

吉野 幸夫（天津市）

金曜日の夕方、新横浜駅は人で溢れている。賑やかな中に侘しさを感ずるのは、関西方面への家路を急ぐ単身赴任者が多いからだろう。

雑踏の中で、私も家路を急いでいた。今から大津の自宅に帰っても十一時を過ぎるから寝るだけになる。週末を家で過ごして、日曜日の夕方には、また横浜に戻る。この生活をもう二年以上続けている。

新幹線に乗る前に夕食を買っておこうと思って、駅にある奇応軒の売店を覗いた。名物のシウマイ弁当、美味いのだが、毎回となると飽きてしまう。仕方ないなあと思つて食品サンプルを眺めていると、横に、うなぎ弁当、という小さな貼り紙があった。うなぎ？ どうして中華料理店がうなぎ弁当を作っているんだらう？

「この、うなぎ弁当は、まだある？」

期待を持って店員に声をかけてみた。

「すみません、売り切れなんですよ。シウマイ弁当、美味しいですよ」

私は、よほど残念そうな顔をしていたのだろう。女性の店員は申し訳なきように、言葉を継いだ。

「あまり、数をつくらないものですからね。すぐに売り切れてしまうんです」

仕方なく、シウマイ弁当とビールを買って新幹線に乗った。列車がゆつくりと動き出した。弁当を食べ始めるが、奇応軒のうなぎ弁当が気になって仕方がない。中華風に料理してあるんだらうか？ 酢豚のように甘酢餡を絡めてあるのか、それならきつと美味いに違いない。妄想が限りなく膨らんでくる。

そうこうしているうちに、京都駅に着いた。大津まで引き返して、またバスに乗る。バスに揺られながら、次回はもっと早く弁当を買いに行こう。その為に、六時に会社を出て、などと、他愛のないことを考えていた。

週末、家で中学受験を控えている子供の勉強をみる。単身赴任の親にとつて、これぐらいしか子供にしてやれることはない。そんな中でも、うなぎ弁当のことが妙に頭から離れない。そして、日曜日の夕方、京都駅に出て新横浜に戻る。夜遅いので、当然のことながら、新横浜駅の売店は

閉まっている。

一週間が、あつという間に過ぎて、金曜日の夕方、定時のチャイムが鳴った時、仕事脳になっていた私の頭に、突然、うなぎ弁当が現れた。早く買いに行かないと売り切れてしまう。慌てて帰る私を皆が見て、何事かという顔をしていた。

次の週も、その次の週も、うなぎ弁当は売り切れていた。何度もうなぎ弁当のことを聞くので、店員さんとは顔なじみになって、私の顔を見ると、残念ですね、今日も売り切れました、と言ってくれる。取り置きしましょうか、とも言われたが、必ず毎週新幹線に乗るとは限らないので、遠慮しておいた。

私立中学の入学試験の日、妻が風邪をひいたので、私は子供を連れて試験会場に向かった。試験中、講堂で待つているのも退屈なので、近くの寺に拝観にいつ合格祈願をすることにした。しかし、これがいけなかった。会場に戻ると、名前を呼ばれている。聞けば熱を出して保健室受験をしているとのこと、これでは絶望的だ。

次の週、合格発表の日に大津に戻ったが、うなぎ弁当のことは頭から吹き飛んでいた。妻と子供は風邪が治っていなかったもので、私が一人で見に行くことになった。会場に

近づくにつれて、足取りが重くなってくる。保健室受験で合格したら奇跡だ、そう思いながら、掲示板の番号と受験票を見比べていく。あった！ もう一度見る。間違いではない、確かにこの番号だ。そう思った途端、涙があふれだした。

子供が無事に志望校に入学した後、嬉しいことは続くもので、私の三年間の単身赴任が五月で終わり、滋賀に戻ることになった。週末、会社で挨拶を終えて新横浜駅に向かう電車の中でうなぎ弁当のことを思い出した。結局、縁がなかった。次に新横浜に来るのはいつだろう？ そんなことを考えながら改札を通り、ふと売店に立ち寄ると、顔なじみの店員が、うなぎ弁当ひとつだけ残っていますよ、と差し出してくれた。取り置きしてくれていたのかも知れないと思ひ、札を言つて買い求めた。これで横浜に心残りはない。

のぞみが走り出すのを待つて、弁当の包み紙を開けはじめる。どんなうなぎ弁当だろう？ 中華風だから甘酢餡掛けか？ いや、鰻シウマイだろう。想像が膨らんでくる。蓋をとると、米飯の上にうなぎの蒲焼が乗つて漬物が添えてある、ごく普通のうなぎ弁当だった。しかし、いままで食べたどんなうなぎ弁当よりも満足できた。手に入れる

までの苦勞がそう感じさせたのか、単身赴任を終えた安堵もあつたのかも知れない。ともあれ、子供の進路も決まり、ほっと一息、滋賀でまた、家族一緒の生活が始まる。

特選

未来への手紙

叶 葉湖（東近江市）

人は生涯で何通の手紙を受け取り、何通の手紙を書くのだろう。人が受け取る手紙の数について、ある調査では、半年に一回以上手紙を受け取る人が約65%いるという結果が出ている。現代ではメールやSNSの普及により、手紙を書く機会が激減している。私も今では手紙を書くのは我が子の誕生日ぐらいだが、若い頃は手紙文化が日常に溢れていた。友人との手紙交換、遠方の祖母、同い年の従妹とは文通もしていた。これまでたくさんの手紙をもらった。その一つ一つに物語がある。その一つの物語を紹介したい。

2025年の春、一通のA4サイズの封筒が家に届いた。宛名は子供も含めた家族四人の名前。封筒の右下には、20周年への歩み事業「10年後への手紙」※平成27年度に未来ポストへ投函された手紙をお届けします。東近江市企画部企画課と印字されていた。私は頭をフル回転させ過去の映

像を巻き戻した。

2016年4月24日、私たち家族四人は滋賀県東近江市で毎年恒例のジャズフェスティバルに参加していた。市役所前の会場でジャズの生演奏と飲食を愉しむ途中で、10年後への手紙と掲げられたイベントの一角に遭遇した。その場に備えられた筆記用具を用いて即興で手紙を書き、設置された未来ポストに投函したことを思い出した。東近江市の10年後への手紙事業は市政10周年の2016年に実施され、市政20周年を迎えた2025年に郵便出発式が開催され、過去に投函された手紙を10年後に届けるタイムカプセル事業であった。これほどまでの夢のあるプロジェクトが他にあるだろうか。その壮大な事業が完遂された証拠が、10年後こうして確かに手元に届いたのだ。

私は感激のあまり、すぐには開封することができなかった。心を落ち着かせてから開封すると、中にはさらに二通の長封筒が入っていた。なんと嚴重な取り扱いだろう。二通の封筒の宛名はそれぞれに娘と息子の名前が書かれていた。娘宛ての封筒には二枚のはがきが同封されていた。一枚目は当時6歳の娘が10年後の自分に向けて書いた手紙であった。子供らしい少女漫画風のタッチで描かれた自分の似顔絵の下に、がんばってねと一言添えられている。二枚

日は、私たち両親から16歳になつてゐるであろう娘への手紙であつた。

元気にしてますか。もうあまり一緒にお出掛けしたりはしていないだろうなあ。それでも父ちゃんは、君たちを大事に思つてゐるよ。

高校一年生になつてゐるのね。色々なことに頑張つて下さい。ママも父ちゃんも、いつもああなたの一番の応援団ですよ。

夫はパパと呼ばれるのを嫌がり子供たちに父ちゃんと呼ばせてゐる。私もそれに合わせて母ちゃんと呼ばせようかと悩んだが、自身の風貌がザ・母ちゃんに変わつていきそうなことを懸念してママを貫いてゐる。父ちゃんとママ、なんともアシンメトリーな両親である。また、娘は今でも夫と一緒にしょっちゅう本屋に行くし、夏休みは毎年必ず福井県に釣りと海水浴に出掛けている。

息子宛ての封筒にも同じく二枚のがきが同封されてゐた。一枚目は当時4歳の息子が描いた似顔絵。いくつもの丸がぐるぐると描かれてゐるだけだが、かろうじて顔だと分かる。絵の下には私の筆跡で父ちゃんの顔と補足してある。二枚目は、やはり私たち両親から10年後の14歳の息子へ宛てた手紙であつた。

毎日楽しく過ごしていますか。たまにけんかもあるけれど仲良しな父子でいられたら嬉しいなあ。大好きだよ。

中学二年生になつたのね。毎日笑顔ですか。

ママと父ちゃんはいつでも、これからもずっとあなたの一番の応援団です。何でも相談してください。頑張つてね。

当時はけんかをしてゐたのだろうか。叱ることはあつても、夫と息子がけんかをしたところは、今までほとんど見たことがない。今でも仲良しの父子だ。それにしても、私がかいた手紙ときたら、娘への手紙とまるで変わらない。どうやら応援団に勝る言葉はないと確信してゐるようだ。決め台詞である。自分のボキャブラリーの乏しさに苦笑した。その日のうちに改めて家族全員で手紙を読んだ。娘はおほろげに覚えていたが、息子は全く記憶がないと言ひ、独創性に富んだ自分の絵を見て笑つてゐた。

10年という歳月は長いようで短い。しかし子供の成長ぶりを目の当たりにすると、実に充実した時の流れであつたかといふことを思い知らされる。それを一番に物語つてゐるのが、現在7歳の次女の存在だ。10年前にはまだ存在していなかつた命がここにあると思うと不思議な気持ちになる。また改めて10年後の未来へ向けて、今度は三人の子供と夫、さらには私自身にも宛てて五通の手紙を書きたいと

筆 随

率
いう気持ちが沸き上がってきた。きつとまた私は応援団を
いるに違いない。